

自閉症（傾向）・軽度知的障害児の母親の主観的困難（たいへんさ）と 当事者による対処戦略に関する研究

朝倉 和子

知的障害児とその母親が直面する困難は何か、今回は特に自閉症（傾向）・軽度知的障害の子どもを母親を中心に調査を行った。その結果、自閉症（傾向）・軽度知的障害ならではの問題が見られた。本人や母親も障害について正確に理解がしづらいこと、その要因として医師等の専門職においても診断が困難であることが挙げられた。また、軽度故に障害が表面化しづらかったり、自閉症という障害特性が周囲から理解されづらいこともあり、母親はわが子の障害について、周囲に対し理解や支援を求めることに消極的であった等、障害について知らされ、理解すること、周囲に理解されることの困難さが大きな特徴であった。他の障害との差異も多く見られ、障害の特性、状況に沿った子育て過程を見ていくことの重要性と支援のあり方の困難さが明らかになった。

キーワード：障害児の母親 主観的困難 対応の仕方 質的研究 自閉症・軽度知的障害

1. 研究目的

本研究は障害児の母親が子育て過程において困難（たいへんさ）とすることは何か、そしてその困難への対処方法をテーマとしている。

これまでの報告では、障害者の家族、特に母親（当事者と位置づける）を中心に、わが子が幼児期・学齢期のころの母親が直面する生活困難の実態と要因、さまざまな支援関係のあり方について事例研究を通じて明らかにすることを試みた（高橋他 2005, 2006）^{注1}。

その中で、母親自身が知識を得て自分の子どもを理解し、その理解を家族関係や専門職を含めた周囲の人間に広げてく過程と、わが子が幼児期における「支えられた」体験が「たいへんさ」の対応方法に大きく影響していることが確認できた。

母親への支援の中で留意すべきこととして、福祉や医療専門職、親族、地域の人々は母親にとって重要な支援者となるが、逆に母親を追い詰める存在にも成り得ること、その原因は子どもの障害

への無理解が大きな要因であることがわかった。さらに母親が感じるたいへんさはこどもの成長と共に変化していくこと、母親のたいへんさの軽減には、母親同士のつながりが大きな役割を担っていることが理解できた。

今回はさらに、自閉症（傾向）・軽度知的障害の障害を持つ子どもの母親が困難であると感じる出来事は何かに注目し、特に、子どもの障害に起因する困難の特性と、それを解決するための社会資源への働きかけ、適応の仕方、母親の主観的な受け止め方の変化、その過程における自閉症（傾向）・軽度知的障害という障害特性が与える影響を中心に過程分析を行うことを目的とした。

2. 研究方法

2007年4～5月にかけて、都内某区にある親の会に所属する障害者の母親6名に対し個別に半構造化インタビューを行い、特徴的な事柄が多く語られている5名を分析対象とした（表1）。

表1 個別での聞き取り回答者の属性

ケース	母親の年齢	子どもの障害・年齢・性別
1	43歳	知的障害・自閉症傾向・愛の手帳2度・18歳・男性
2	46歳	知的障害・自閉症傾向・愛の手帳2度・19歳・男性
3	55歳	軽度知的障害（正確な診断は未）・愛の手帳4度・21歳・会社員・女性
4	不明	軽度知的障害（正確な診断は未）・愛の手帳なし・10歳・男児
5	59歳	脳性麻痺・知的・身体障害・愛の手帳2度・28歳・男性

さらに今回は、自閉症（傾向）及び軽度知的障害ならでのたいへんさが多く現れたケースの事例を中心に分析を行った。質問内容は客観的事実の聞き取りとして、これまでの生活（幼児期、学齢期、青年期）でたいへんだったこと、嬉しかったことは何か、その出来事と時期について聞き、主観的な事実の聞き取りとして、その出来事についての母親としての感想、解決の方法を中心に聞き取りを行った。インタビュー時間は各90分程度である。事前に郵送にて「事前記入用紙」の記入をお願いし、その用紙内容に沿ってインタビューを行った。インタビュー内容は録音し分析作業を行った。

また、ケース5の障害は脳性麻痺であるが、自閉症（傾向）・軽度知的障害との比較を目的としている。

3. 倫理的配慮

本研究では聞き取りの内容を事例として公表するため、被調査者に対して事前に原稿等を見せることを約束した。調査者が当時者の背景を正確に把握するため、かなり詳細な部分も語ってもらったが、プライバシー保護に配慮し被調査者が公表を望まない部分・箇所が生じた場合はその意向に沿うこととした。

4. 調査結果

これまでの我々の調査・報告により、障害児の母親は下記の1から4に示したような出来事の連続を繰り返して体験し、こうした出来事は、順序良く進むわけではなく、前後しながら螺旋的な展開がなされていると考えられる。

1. 子どもの障害について知らされる
2. 子どもの障害を理解する
3. 子どもの障害をオープンにする
4. 子どもの障害を理解してもらう

今回の調査においても、これまでと同様に上記の1-4の段階に沿って分析をしていくこととした。

今回の調査において、わが子が自閉症（傾向）・軽度知的障害である母親から上記の4つ過程と展開において、その障害特性からなる“たいへんさ”とその特性が多く見ることができた。わが子が自閉症（傾向）・軽度知的障害である場合の特徴として、他の障害と比べ上記の4つの展開がし辛いこと、第三者（地域の人々など）の存在が少ないことが挙げられた。このような過程の裏には、その障害特性から母親自身や周囲の人間が、子どもの障害について理解することが困難であることが大きく影響している。

次に上記の1-4の段階毎に事例とともに分析結果を述べる。

1) 子どもの障害について知らされる

自閉症（傾向）・軽度知的障害の場合、その診断の困難さから、母親に対しわが子の障害状況を正確に知らされる機会が適切な提供されていないことが挙げられた。

①わが子の障害への戸惑い

自閉症（傾向）のケースの場合、特に幼児期は、突然に現れた自傷行為、こだわり、パニック等、自閉症特有の特性に戸惑いやたいへんさを感じる事が多い。自閉症（傾向）は幼児期には診断が難しく、わが子の発達状況について心配しながら、診断がでるまで不安を抱えながら過ごしているようすが語られている。また、障害の伝え方においても医師、看護師、心理職等によって診断に異なる部分があり、母親が戸惑うことが多い。自閉症という障害が専門職においても理解されにくく、母親自身もこのような状況の中で困惑をしてしまう。

「1歳半検診も無事に終わりました、ただ言葉が出なかったというより、アンパンマンとバイバイの2つしか言えなかったんです・・・

やはり2歳半くらいになってもしゃべらなくて、・・・3歳前に突然自傷行為が始まったんです。嫌なことがあると後頭部から倒れて、ぐずることが始めて笑わなくなったりもしたので・・・」(ケース1)

「問題行動が一番辛かったです。とにかく多動で、親の言うことは聞かないし指示が入らないし、小さいころから一緒に歩くということも難しかったです。・・・」(ケース2)

②明確な診断の困難さ

自閉症(傾向)・軽度知的障害は、子どもが成長しても正確な診断がなされていないことも多く、“障害を知らされる”という重要な機会が提供されていないことが挙げられる。また、医師等の専門職においても診断が困難であることが多い。

脳性麻痺やダウン症等、障害が比較的明確に現れる場合と異なり、自閉症(傾向)・軽度知的障害における難しさとも言える。

「病院では耳が聞こえないんじゃないかと言われ耳鼻科へ通って・・・リハビリセンターに通って・・・心理学の方へまわして頂いたんですが、その心理学の先生が「私には手がおえない」と言われまして・・・」(ケース1)

また、何かしらの診断が下された場合においても、母親は何となく予期していたものの、そのショックは大きく、わが子の将来についても大きな不安を抱くことがわかる。さらに、その診断もただ“知的に障害がある”、“～の可能性がる”ということだけで、具体的な対策は提示されないことが多く、医師や心理職等の専門職からの支援のあり方の問題や、専門職にとっても自閉症(傾向)・軽度知的障害についての対応が困難であることが伺える。

「うすうす何か言われるだろうとは思っていましたが・・・でも聞いたときは(海外で生活しており)日本に帰ってきて私一人だったんです。ショックでしたし、その日は眠れなかったですね。・・・これからのことを考えるわけですね。それでやっぱりそこに伴う困難さをまず想像するわけですね。」(ケース4)

「・・・N君は知的レベルが他のお子さんよりも凄く低いのですよ、と言われました。・・・その事をボーンと言われてうすうす自分も感じていたので、どうにもならないのだという事がわかりました。」(ケース2)

「最初は教育相談みたいところで、医師ではなくて学校のカウンセラーをやっている方で「出来る事と出来ない事の落差が激しいお子さんですね。」っていうことだけ言われて帰ってきました。(ケース4)

2) 子どもの障害を理解する

わが子の障害の理解に必要なこととして、育て方への具体的な助言と将来像の見通しが母親に必要であり、専門職や身近な人々によるサポートの重要性が挙げられた。

①親の会や信頼できる施設職員等の存在、家族の存在の重要性

わが子の障害状況が明確に知らされていない状況で“子どもの障害を理解する”ことは困難なことと考えられるが、自分と同じくわが子が障害である母親同士のつながりは、大きな支えとなっている。悩みを打ち明けたり、年上の親子を見て、わが子の将来像をイメージしたりと具体的な助言者となっている。また、わが子の障害について、漠然と自分のせいではないかと自分自身を責めてしまったりすることが多いが、それも、同じ境遇の母親をみて安心をする。

「うちの子みたいなのは将来どうなるんだろう、と心配だったんですね。でも先輩のお母さんに話を聞いたら「うちも小さいときはこうだったのよ」と、お子さんをみると「ええ!」、すごい希望が持てました。あと心強いなって思いました。こういう時ってどうしたらいいですかって聞いたら「ほっておけばいいのよ」と気軽に言ってくれたので、すごく心が救われました。」(ケース1)

家族については、概して子育てには協力的であることが多く、母親にとって重要な支援となっている。普段わが子につききりの状態である母親とは違う視点が母親や子どもに対し良い影響を与

えている。

「・・・父親は、精神面ではいろいろと・・・困ったときにはお酒を飲みながらでしたけど、いろいろ聞いたりとそんな感じでフォローしてくれました。」（ケース3）

「うちの夫は本当にいい人で、平日は忙しかったり、出張もよく行ったりしているんですけども、でも土日なんかは本当にすごく面倒を見てくれるんですよね。私自身は学校や幼稚園に行ったりして、見たくない行動を見るわけじゃないですか。またあんなことやって・・・とか、そういうのがやっぱりあるんですよね。ただ夫にしてみると、そういう姿を見るのは年に2.3回しか見る機会がなくて、基本的には家の中なので、そんなにとんちんかんなことしてる所っていうのは見る機会があんまりないので。でもそういうことは関係なしに、うちのおっとは最初から受け止めていたというか、もちろん心配はあったと思うんですけど、気持ち的には私なんかよりよっぽど受け止めてると思いますね。だから子ども達は本当にお父さんのことが大好きですね。」（ケース4）

②行動特性の理解

母親は、わが子の障害特性をどのように理解し、どのように接してよいのか分からない状態が続き、どう育てればよいのか、あるいは子どもが将来どのように成長するのか見通しが持てない。このような中で母親は自分で情報を集めたり、相談をしたりと積み重ねの中でわが子の行動特性について理解をしていく。様々な情報と相談できる環境、そして積み重ねの時間が必要であることがわかる。特に“こだわり”が強い場合、母親は模索しながらもあらゆる方法で対応している様子が語られている。

「こういう状態の子だって分かっても、それに対してどうすれば良いかは分かっていたんですよ。いろんな本を買って読んだり、人に相談しているうちに、少しずつ分かってくることなので。今だったら大体の行動はこういうことかなっていう推測も立ちますし、注意するときの効率的な言い方も分かっていたんですが、

当時は何も分からなくて、・・・私ってなんてひどい母親なんだろうって。その繰り返しやっぱ辛かったですね。子どもに対してどう言ったらいいんだろう。行動の意味も、分からないこともたくさんありましたし。だから、本を読みながら、日々の行動を見ながら、試行錯誤しながら、っていう感じでここまで来たって感じですね。」（ケース4）

「歯医者さんの時も・・・とにかく全然違うので行けないんです。で、歯医者さんもあんまり明るい感じの綺麗な所じゃなかったの、それかなあって言う思いもあったんですけど、ここに書いてあるように綺麗な色が好きだったので、とりあえず、歯医者さんの前を散歩コースに入れるってところから始めたんですね・・・で、近くに行くと何度も指差して「あの歯医者さんの前にお花が咲いてるよ。」と言う感じで・・・時間をかけていたら、治療を受けられるようになったんですね。」（ケース3）

③わが子自身による自己理解

軽度知的障害特有の部分ともいえ、障害をもった本人自身が「自分はどのような人間なのか？」と疑問を抱くようになる。中学生くらいになり、周囲の状況を見渡せるころになるとそれは顕著に現れる。また、障害特性によりコミュニケーションや友人関係等に問題が生じる場合も少なくなく、母親に対して感情をぶつけることもある。これは軽度知的障害特有の母親にとって新たな問題であり、さらにこの時期になると、幼少期のように医療機関や障害児学級のような環境に接する機会も少なくなり、母親に適切な助言ができる第三者的な支援者の存在も少なくなることが考えられる。

「自分は何だろう？という思いがずっと続いてまして、中学校・高校と同じようなテーマが続きます。「私はどうしてこのクラスに居るんだろう？どうして私は普通学級に居ないんだろうか」と。普通学級にいたら、もっといろいろと友達交流が出来るのにといいそういう思いが強くて続きましたね。それに対していろいろ話すんですけども、「混乱する」とか、あの「親

がどうして私をこんな学級に入れたのか」「私は、もっと違った友達が出来たのに」と、非常に親に対して反感を覚えたりとかそういう時期でしたね。特に小学校時代にいろいろありましたけど、特に中学校というのそういう事を言い始めましたので。」(ケース3)

3) 子どもの障害をオープンにする

周囲に対し、障害が重度の場合は障害が表面化しやすく、わが子の障害をオープンにしやすい。しかし、障害が軽度の場合は制度的に障害が認められづらい現状や母親自身がわが子の障害をオープンにすることへ抵抗感があったりと重度障害と軽度障害での違いが見られ、軽度障害ならではの困難性が挙げられた。

①公共施設の利用

多くの母親が電車等の公共施設を利用しながら、わが子のように障害をもった人の存在を知ってもらおうと願っている。理解してもらおうとする手段として、母親たちは言葉ではなく、外へ出てわが子を見てもらうことによって子どもの障害をオープンにし理解してもらおうとしている。しかし、これはわが子に重度な障害がある場合であり、軽度の障害の場合は“オープンにする”“わが子の障害を知ってもらいたい”という行動は見られなかった。わが子について健常児と変わらないと意識したい気持ちの表れであるとも言える。故に軽度障害の場合は、母親自身による周囲への働きかけが少なく、それが支援体制の乏しさへつながりかねない。適切な支援、社会資源の活用が成されるためにも、軽度障害の母親にこそ周囲からの働きかけが必要と思われる。

「言葉じゃなくて、現物を見せるって言ったら変ですけど、私は十何年間送り迎えしてきて、すごいいろいろあったんですよ。警察沙汰になったこともありますし。それにやはり、自閉なので決まった電車、決まった乗り場所、決まったバス、決まった座るところ、だんだん顔なじみになってくるんですよ。・・・「こういう子がいるんだよ」という証明っていったらなんですけど、教えることにも広まるんですよ。」(ケース1)

②愛の手帳について

愛の手帳について、「本当にお守りです。愛の手帳は。水戸黄門さんの印ろうじゃないですけど。最終的な手段かなと思いました。」(ケース1)というように、何か問題が生じた際、周囲に理解を求めるための最終的な客観的な手段として重要としているケースもあった。外見での障害の有無が分かりづらい軽度知的障害こそ、手帳のような客観的なものが必要と思われるが、手帳の取得が困難であったり母親に抵抗があったりすることが少なくない。

4) 子どもの障害を理解してもらう

自閉症(傾向)・軽度知的障害の場合、わが子について母親が周囲に理解や協力を求めることに消極的であった。その要因として、障害の特性が理解されづらい状況が挙げられた。

①子ども自身の友人・人間関係(理解されないことのジレンマ)

本人の希望で普通高校(定時制)に入学したものの周囲から障害が理解されず、友人関係での悩みが語られている。軽度知的障害の場合、人との距離感や言葉のニュアンスを上手く捉えることができないといったことから人間関係で問題が生じることが少なくない。本人も人間関係が上手くいっていないことにジレンマを感じたりと、理解力があるからこそその問題が現れる。母親はこのようなわが子の様子を見て、本人にとって本当にふさわしい環境の提供の困難性を強く感じている。

「(普通高校に)いざ入ってみると、やはり周りの方とずいぶん輪の中に入れなかったりとか、コミュニケーションがうまくとれなかったり非常に悩んでイライラして言うのは高校時代ずっと続いてました。」(ケース3)

「まあ、若干友達は出来ましたけれども、自分が抱いてた、そのみんなと勉強するっていうイメージとはそうとうひらきがあったので・・・責めてたと思います。・・・後輩とたまたま駅で会ったら、「何かご馳走しろよ。」って言われて。・・・その時に何も反撃しないんですね。やっぱり声かけてくれたんだから、何かしっかり掴まえておこうという事で、本人は、嬉しい

んですね。多少のことで済む事ならお金出しておこうというかたちで・・・ちょっと歯痒い事もありました。」（ケース3）

②祖父母等父親（夫）以外の家族について

自閉症（傾向）・軽度知的障害の場合、父親（夫）は概して子育てに協力的であるが、祖父母等父親（夫）以外の家族・親戚との協力関係はあまり見られない。わが子の障害を受容してくれた場合もちろんあるが、母親から理解してもらおうという積極的な提示は見られない。障害を理解してもらうことの困難さが影響していると思われる。

「サポートは、特に・・・私4人兄弟である女の子3人で3番目で下に弟なんですけど、電話で近況を話すくらいで特にサポートはなかったですね。」（ケース3）

「それで親の世代っていうのは、ダウン症とか肢体不自由とかなら分かると思うんですけど、高機能自閉症とか、アスペルガーとか割と最近になってわかってきたものなので、言えなかったですね。親には逆に。自分自身もよく分からない事を説明するのがすごく難しくて、言葉も遅いし、こういうところが不安なんだって言っても、常に会ってる訳じゃないし、年に1回会う位なので。」（ケース4）

反対に、わが子の障害がわかりやすい場合、母親はわが子について家族に対しても積極的に理解をしてもらおうとしていることが多い。

「それでこの主人の父親、おじいさんね。あのおじいさんがなんていうのかなH君によって変わった。アハハハハハ・・・すごいその人もカーテン屋を自分で始めたからすごい商売熱心だったんで、お店でしたでしょ、・・・表からそういう障害児を抱えて、こんなになって商売の邪魔するなみたいに。はっきり言わないけど・・・だけどもうそうふうにしてられない・・・H君だって私マイペースだったから頑として受けつけなかった。アハハハハ。あの一すごい悪い嫁だったんですけどね、アハハハハ。だけどあのそしたらあの変った。すごい変った。」（ケース5）

③地域との交流について

今回の聞き取りでは、地域との交流（ご近所関係など）はほとんど語られていない。これは自閉症（傾向）・軽度知的障害の子育て過程においての特徴的なことである。

5. 考察

今回の研究において特徴的なことは、自閉症（傾向）・軽度知的障害の場合、その正確な診断が困難であり、その困難さがあらゆる場面で影響をしていることである。明確な診断がなされない中で“障害を知らされる”という機会が提供されず、母親は自分自身でわが子の障害状況を見極め、多くの事柄に対処してきた様子が語られていた。

この中で母親にとって重要な存在として挙げられるのは同じ障害をもった母親同士の支えや夫や家族である。わが子の将来像を具体的に示してくれたり、適切な助言を与えてくれたりと、母親の精神的な安定を保つ機能として重要な役割を担っている。しかし、自閉症（傾向）・軽度知的障害の場合、その他の親戚については、母親自身から積極的にわが子の障害について受容や協力を求めるという行動は見られない。同じく今回の聞き取りの中では、地域（ご近所関係）との交流もほとんど語られておらず、これは自閉症（傾向）・軽度知的障害が周囲に理解されることの困難さを象徴すると同時に、母親自身が必要としなかったことも考えられる。わが子について周囲に理解されることは障害児の母親にとって重要な要素であると思われるが、軽度障害の場合は母親自身に障害を積極的にはオープンにしたくない、認めたくない、という感情があると思われ、家族や母親同士以外の相互支援関係の薄さが挙げられる。

以上、自閉症（傾向）・軽度知的障害における子育て過程における特徴に着目してきたが、障害が知らされ、理解すること、周囲に理解されることの困難さが大きな特徴的であった。軽度知的障害への支援が見落とされている現状があり、支援の在り方の困難さとより具体的な支援体制のあり方への検討の必要性が挙げられた。

また、継続研究として、2007年10月より、わが子が障害を持つ母親6名に対し新たな聞き取り

調査を行っている。現在、研究の過程であるが、2007年10月以降の聞き取りの中では、子育て過程における母親自身の困難への対応の方法、姿勢について6名の間において差異が認められた。子育て過程において社会資源や地域に対し積極的に関わってきた母親と、関わりに消極的な母親の存在が見られ、また、母親同士のつながりにおいても、これまでは支援における重要な要素であったが、負担に感じているケースもあり、母親間のネットワークに対する負担感といった新たな要素も幾つか確認できた。

今後、継続研究では聞き取りの中におけるこれらの新たな要素を中心に母親のエンパワメント過程を構成する要因は何か、逆に母親は何に不安を感じているのかという視点に留意し、わが子が障害を持つ母親に対し、還元性のある、より具体性を持った支援のあり方について検討を行っていききたい。

注

- 1) 2005, 6年の調査結果については以下を参照のこと
- 1) 高橋幸三郎 他 「知的障害・自閉症的傾向がある子どものいる家族の主観的困難(たいへんさ)と生活支援に関する質的研究」みずほ福祉助成財団研究助成研究報告書 2005
- 2) 朝倉和子・高橋幸三郎「障害児の母親が感じる生活困難と対応の仕方」『東京家政学院大学紀要』第47号人文・社会科学系 2007年 11-19
- 3) 高橋幸三郎他「お母さんはどのようにして元気になるのか」平成19年度 科学研究費助成報告書 2008年

参考文献

- 1) 石川准「アイディンティティ・ゲーム」新評論社 1992年
- 2) 石川准「障害児の親と新しい「親性」の誕生」井上真理子, 木村英明編『ファミリーズの再発見』(世界思想社, 1995年)
- 3) 石原邦雄『家族の生活ストレスとサポート』放送大学教育振興会 (2004年)
- 4) 植村勝彦, 新美明夫「心身障害児をもつ家族」松田惺編集『新・児童心理学講座第12巻: 家族

- 関係と子ども』(金子書房 1991年) p157-193.
- 5) 植村勝彦, 新美明夫「学齢期心身障害児をもつ父母ストレス: ストレスの背景要因」『特殊教育学研究』23巻第3号 (1985年) p23-33.
- 6) 植村勝彦, 新美明夫「発達障害児の加齢に伴う母親ストレスの推移—横断的資料による精神遅滞児と自閉症児の比較をとおして—」『心理学研究』第56巻第4号 (1985年) p233-237
- 7) 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房, (1989年)
- 8) 門恵子(他)「障害児を包含した親子心中」『熊本大学教育学部紀要, 人文科学』第34号 (1985年) 171-179.
- 9) 久保紘章「自閉症児をもつ母親の『大変さ』について: 母親の生活時間調査と面接から」『四国学院大学創25周年記念論文集』(1975年) 505-530.
- 10) 久保紘章「自閉症児をもつ母親の生活状況と意識 岡山県における実態調査から」『四国学院大学論集』47 (1980年) 83-106.
- 11) 澤江幸則「障害幼児をもつ父母の子育て充足感についての研究—子どもに対する関係認識と地域資源の利用の関連から—」『発達障害研究』第22巻第3号 (2000年) 219-229.
- 12) 杉野裕子「現代の子育てと育児ネットワーク」『母子研究』No22 社会福祉法人真生会社会福祉研究所 (2002年)
- 13) 松田茂樹「育児ネットワークの構造と母親のWell-Being」『社会学評論』52 (2001年) p33-49.
- 14) 菅谷よし子「家族のライフ・ステージと妻の第一次関係形成: 鹿島工業地帯における振興住宅団地を事例として」『家族研究年報』6 (1980年). 42-59.
- 15) 田中正博「障害児を育てる母親のストレスと家族機能」『特殊教育学研究』34 (3) (1996年) 23-32.
- 16) 田淵六郎「家族戦略研究の可能性: 概念上の問題を中心に」『東京都立大学人文学報』No. 300 (社会福祉学 15) (1999年3月) 87-117.
- 17) 土屋葉『障害者家族を生きる』勁草書房 2002年
- 18) 中根成寿『知的障害者家族の臨床社会学』明石書店 (2006年)
- 19) 中野孝子「家族ストレスに関する基礎的研究—心身障害児をもつ親のストレス—」『教育学科研究

- 年報』第19号．関西学院大学（1993年）69-84.
- 20) 新美明夫（他）「心身障害児を持つ母親のストレスについて—ストレスの構造—」『特殊教育学研究』18（4）（1981年）59-69.
- 21) 藤崎宏子「現代家族と『家族支援』の論理」『ソーシャルワーク研究』No3．2000年 4-11.
- 22) 藤崎宏子「家族はなぜ介護を困り込むのか」副田義也（他）編『現在家族と家族政策』ミネルヴァ書房（2000年）161-161.
- 23) 藤原里佐「障害児の母親役割に関する再考の視点」『社会福祉学』431（2002年）146-153.
- 24) 南山浩二「精神障害者家族の認知と対処に関する研究」『社会福祉学』第37号日本社会福祉学会（1996年）38-56.
- 25) 溝上脩（編）『障害者のライフコース』川島書店．（1996年）.
- 26) 宮崎直男著『通級教育が始まる』障害児教育の新展開14（明治図書出版，1992年）
- 27) 山田昌裕『希望格差社会』筑摩書房 2004年
- 28) 山本多喜二・ワップナー，S. 編『人生移行の発達心理学』（北大路書房 1992年）
- 29) 要田洋江『障害者差別の社会学：ジェンダー・家族・国家』（岩波書店，1999年）
-
- (2008.3.27 受付 2008.5.19 受理)